# 松坂屋初代社長・伊藤祐民（すけたみ）と揚輝荘 ～松坂屋史料室・揚輝荘 共同企画～

## 平成24年9月1日（土）→11月27日（火）

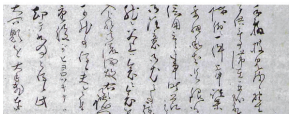
伊藤家15代祐民（1878−1940）は、明治11（1878）年5月26日、現在の名古屋市中区丸の内二丁目で、父祐昌、母みつの4男として誕生した。兄3人が早世し、嗣子となった祐民は、明治43（1910）年、名古屋初のデパートメントストアいとう呉服店を広小路の栄町に創設するなど、家業の呉服店の改革に乗り出した。さらには、伊藤銀行（現三菱東京UFJ銀行）、誠工舎など直系事業のみならず、名古屋製陶、日本貯蓄銀行、愛知時計電機、観光ホテル、八勝館など関係事業でも辣腕をふるった。名古屋商工会議所会頭をはじめ多くの公職を歴任し、地域の発展にも貢献した。その祐民が、大正時代から昭和初期にかけて名古屋市の東部丘陵地に造営したのが別荘・揚輝荘である。ここでは、揚輝荘を①私的な別荘時代、②迎賓館・社交場の時代、③国際交流の場の時代に分けて、祐民の事績とともにたどる。

### 鬼頭幸七宛の手紙（明治41年）

いとう呉服店の百貨店転業への転換点となった、祐民が静岡県の舞阪から出した鬼頭幸七宛の手紙。「（百貨店転業が）否決になれば、小子は世外の人になりても」と捨て身の最後通牒を突きつけ、父・祐昌に翻意を迫っている。日勤別家・3代目鬼頭幸七（旧名渡辺伊之助）は、百貨店開業にあたり祐民社長を補佐。大正2（1913）年に初代専務取締役となり、いとう呉服店の発展と事業の確立に尽力した。

伊藤祐民

鬼頭幸七


鬼頭幸七宛の手紙

### 百貨店を開業（明治43年）

明治43（1910）年3月、祐民は、名古屋市役所の跡地、栄町角の一等地に、名古屋初の百貨店「いとう呉服店」を開業し、初代社長に就任した。屋上にドームをもつ3階建てルネサンス風の洋館、ホール・食堂などの最新設備、斬新な品揃えは、「行灯より電灯に変わりし以上の進歩」と人々を驚嘆させた。

デパートメントストア・いとう呉服店

### ビルマ独立の父ウ・オッタマとの交流

祐民とビルマ（現ミャンマー）独立の父、ウ・オッタマ僧正との出会いは、百貨店開業の年（明治43年）の4月。彼はこの出会いで祐民の支援を受けるようになり、孫文やビハリ・ボース（インド独立運動家、新宿中村屋・相馬家の婿）とも親交を重ねた。祐民とウ・オッタマ僧正との交流は、田中公平が戯曲仕立てに記した『ビルマの太陽』（東亜書林、昭和18年）に詳しい。

祐民とウ・オッタマ

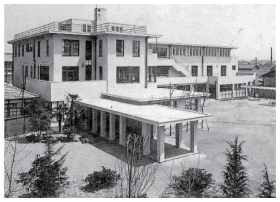
### アジアの留学生を支援

祐民は、アジアの留学生を積極的に受け入れたが、これはウ・オッタマの依頼で大正2（1913）年に6人を引き受けたことから始まる。祐民の死後、揚輝荘の建物全部を開放して学生寮にしてはとの提案があり、たまたま時局柄、学校側においても食住の生活に困っている実情を見て、全荘を寄宿寮として内外の学生を受け入れることとなった。入寮した学生は、シャム（タイ）、中国、モンゴル、インドネシアなど8カ国に及んだ。

揚輝荘の留学生

### 「衆善会」を設立（昭和8年）

昭和8（1933）年、松坂屋社長を退いた祐民が余生を社会事業に捧げるべく、私財100万円を投じて設立したのが「衆善会」。当初は社会事業の助成、災害の救助、アジア各国の留学生の支援などが主な活動であったが、昭和12（1937）年に託児室、授産室などを備えた衆善館を建設して、隣保事業にも乗り出した。


衆善館

### 「戊寅（ぼいん）会」虎の巻（昭和12年）

昭和12（1937）年5月15日、第2回「戊寅会」を名古屋の揚輝荘で開催したときの寄せ書き。虎の絵は久保田金僊、竹は祐民が画いた。明治11（1878）年の寅年生まれの名士の間に、寅年生まれの会をつくろうという機運が高まり、広田弘毅前首相、伊藤祐民など政界、官界、学会、財界の大物30余名が参加して発足したのが「戊寅会」であった。

「戊寅会」虎の巻

揚輝荘は、名古屋市の東部丘陵の市街地が進展した大正･昭和初期、景勝地･月見坂に、自然地形を活かして造られた別荘庭園と、移築を中心に建てられた社交と国際交流の別荘建築群である（敷地面積約3万5000㎡）。祐民は、ここで政財界の関係者や文化人をもてなすとともに、アジアの留学生を積極的に受け入れ、その支援も行った。

## 私的な別荘時代

（大正7（1918）年 ～ 大正12（1923）年）
【祐民41～46歳】

揚輝荘は、大正7（1918）年に最初の建物が造られてから数年間は、建物の中心は「揚輝荘座敷」（矢場町から移築）、「有芳軒」（徳川家から移築）であった。祐民は、大正11（1922）年頃から起居するようになる。

有芳軒

## 迎賓館･社交場の時代

（大正13（1924）年 ～ 昭和7（1932）年）
【祐民47～55歳】

大正15（1926）年に「豊彦稲荷」が勧請され、「伴華楼」など茶室を持つ建物の移築･新築が続いた。皇族、華族、財界人など多彩な人々の来荘、宿泊が頻繁になり、園遊会、観月会、茶会などが数多く開かれる迎賓館、社交場としての性格を持つようになった。

伴華楼

## 国際交流の場の時代

（昭和8（1933）年 ～ 昭和15（1940）年）
【祐民56～63歳】

昭和11（1936）年、シャム（タイ）から揚輝荘･衆善寮に初の留学生を受け入れたのを皮切りに、アジアから多くの留学生を愛知舎などへ受け入れた。戦時下に行き場を失った留学生に救済の場となったのである。昭和12（1937）年、祐民のインド旅行に随行したハリハランが描いたアジャンタ石窟の釈迦生誕物語の壁画、英国風の書斎、中国風の寝室の装飾など、国際色豊かな「聴松閣」が新築された。

聴松閣

## 「第11回企画展　揚輝荘会場」

### 戦後の揚輝荘

祐民は昭和15（1940）年に死去し、揚輝荘は一時の華やかさは陰りをみせ、戦争の前後は日本軍の接収、空襲、そして進駐軍の接収と厳しい時代を迎えた。昭和29（1954）年、揚輝荘座敷、聴松閣は松坂屋の独身寮に改装され、また、長年の放置で朽ち果てた建物も多く、さらに昭和43（1968）年からは敷地内に4度にわたるマンション開発が進み、30数棟あった建物は、土蔵5棟を含む10棟に減り、敷地も1万坪から3000坪に縮小された上に、南園と北園に分断されてしまった。

### 文化財としての揚輝荘

平成19（2007）年、揚輝荘は名古屋市に寄付され、翌年、5棟の建物が歴史的建造物として名古屋市の有形文化財に指定された。現在は、地域の文化的施設として一部が市民に公開され、NPO法人揚輝荘の会が市の委託を受け、揚輝荘の活用･管理業務に携わっている。建物、庭園の案内の他に、園遊会、お茶会、音楽会、国際交流会などのイベントや揚輝荘関連の展示などを開催している。現在は「伊藤家400年」の展示を開催中。来年7月以降、南園の聴松閣が修復整備後にオープンされる予定。迎賓館としての建築の魅力そのものに、イベント、展示などの演出を加えて、昔日の賑わいを取り戻すことが望まれている。

春を楽しむ会

国際交流イベント

伊藤次郎左衛門家400年

＊企画展期間中の揚輝荘イベント

■お茶会（三賞亭）:10月13日（土）、11月10日（土）、11月24日（土）
■お茶会（野点）:10月27日（土）、11月3日（土･祝）、11月4日（日）
■揚輝荘文化祭:11月3日（土･祝）、11月4日（日）
■国際交流会:10月21日（日）
■秋の園遊会:11月25日（日）
※いずれも入場料、予約不要。お茶席は参加料500円。

Matsuzakaya
松坂屋･名古屋店
電話（052）251-1111 www.matsuzakaya.co.jp
【営業時間】本館地下2階～3階、南館地下2階～4階、北館1階は10時→20時　その他のフロアは10時→19時30分　ただし、本館9･10階、南館6･7･10階、北館地下1階で営業時間が異なる店舗もございます。